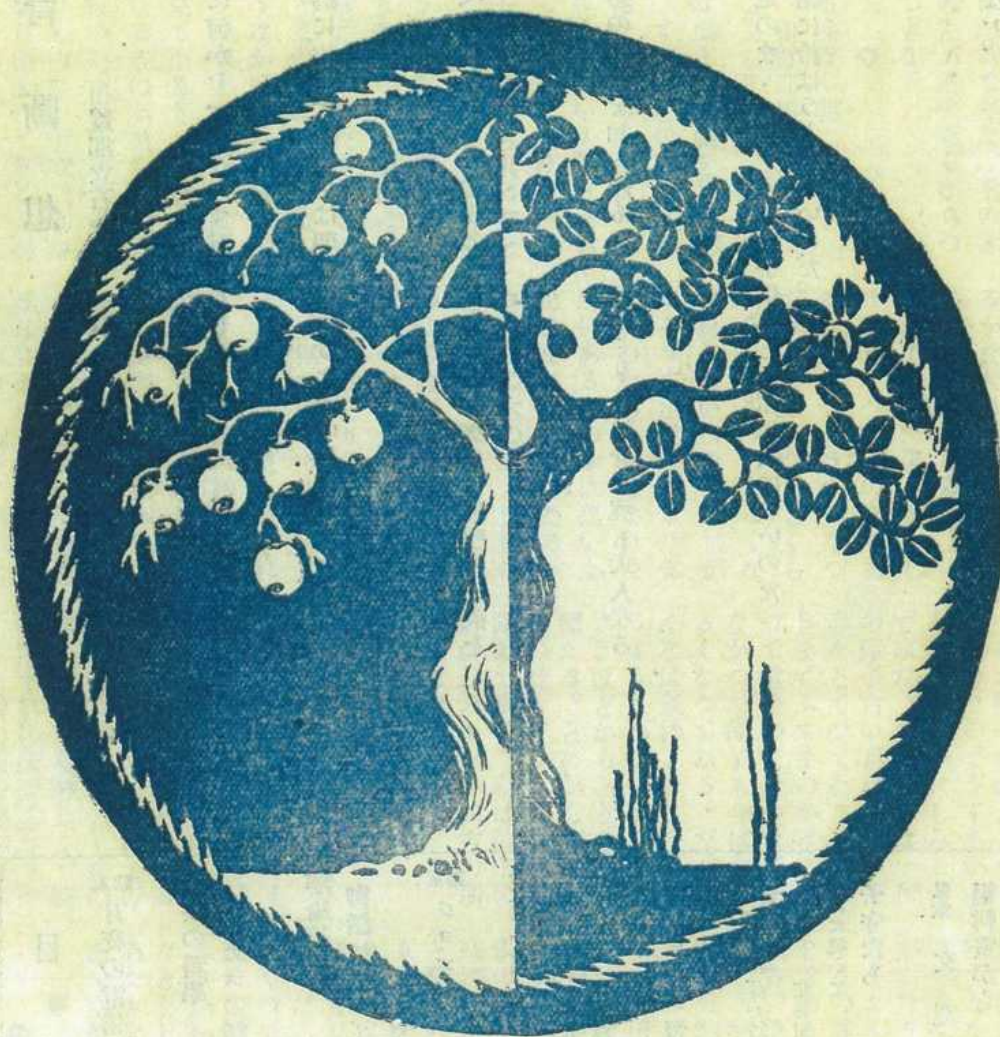


# 力の供子



第 三 號

昭和三年十一月二十二日納本

(昭和三年十一月二十四日發行)

第一卷 第三號



## 教育斷想

和賀郡立石校

小原孤筆

▲兒童は空な器で教師はそれに何かを一杯みたす職人かしら…?

▲與へられる俸給に恥ぢない爲に汝の大きい手は朝霧のやうに柔い兒童の魂にエライ彫刻をやつてゐる…。

▲一定量の重荷を全兒童に與へて監視する汝の眼の冷たき汝はボルガの船唄の哀調をさへ感じないであらう。

▲神の分身が兒童だ、それに惡の部分を加へたものが何か…? 汝は身も魂も大人なる事を恥ぢねばならない…。

▲美衣と胸章をすてゝ何故洗足のまゝボブラの下の子供等と一緒に歌はないのだなぜ丘の上の銀杏の葉と一緒に拾はうとしないのだ。

▲教育者よ汝の名は?  
純真な童心の世界の  
忠實な奴隷であらねばならない。

## 目次

童話 月夜の電信柱 (一) 宮澤賢治

子供の科學

ハマナスの話

杉村松之助

辯論講話

御話について

黒澤尻町モトヂ生

童話 ジョングール少年

小田島柏龍

家庭一週一題

或る母の苦心談

土澤町一女性

教師欄

クレエヨン習字

一記者

現代思潮に對する教育方針

花巻川口町花城小學校

童話に就いて

子守たち

高橋芳夫

兒童文苑

編輯室から





# 童 — 話

## 月夜の電信柱

(一)

宮 澤 賢 治

もう

▽…月の光り…△

ある晩、恭一は。さうりをはいて、すたすた鐵道線路の横の平らなところをあるいて居りました。たしかにこれは罰金です。おまけにもし汽車がきて、窓から長い棒などが出てゐたら、一ぺんになぐり殺されてしまつたでせう。

ところがその晩は、線路見まはりの工夫もこず窓から棒の出た汽車にもあひませんでした。そのかはり、どうもじつに變てこなものを見たのです。九日の月がそらにかゝつてゐました。そしてそらに雲が空いっぱいでした。そらにくもはみんな。

がはらわたの底までもしみとほつてよろよろするといふふうでした。その雲のすきまからときどき冷たい星がびつかりびつかり顔をだしました。恭一はすたすたあるいて、もう向ふに停車場のあたりがきれいに見える

とこまできました。ぼんとしたまつ赤なあたりや硫黄のほのほのやうにぼうとした紫いろのあたりやらで、眼をほそくして見ると、まるで大きなお城があるやうにあもはれるのでした。

とつぜん、右手のシグナルばしらが、がたんとからだをゆすぶつて、上の白い横木を斜めに

▽…下の方へ…△

ぶらさげました。これはべつだん不思議でもなんでもありません。

つまりシグナルがさがつたといふだけのことです。一晩に十四回もあることなのです。

ところがそのつぎが大へんです。

さつきから線路の左がはで、ぐわあん、ぐわあんとうなつてゐたでんしんばしらの列が大威張り

で一ぺんに北の方へ歩き出ししました。みんな六つの瀬戸もの、エボレットを飾り、てつぺんにはりがねの槍をつけた亞鉛のしやつぶをかぶつて、片脚でひよいひよいやつて行くのです。そしていかにも恭一をばかにしたやうに、

▽…じろじろ…△

横めて見て通りすぎます。

うなりもだんだん高くなつて、いまはいかにも昔ふうの立派な軍歌に變つてしまひました。

「ドツテドツテ

ドツテド、

でんしんばしらの

ぐんたいは

はやさせかいにた

ぐひなし

ドツテドツテ

ドツテド



でんしんばしらの  
でんたいは

きりつせかいにな  
らびなし。」

一本のでんしんばしら  
が、ことに肩をそびやか

して、まるで木もが  
りがり鳴るくらゐにして

通りました。

みると向ふの方を、六  
本うで木の二十二の瀬戸

もののエボレットをつけ  
たでんしんばしらの列が

やはりいつしよに軍歌  
を

▽…うたつて…△  
進んで行きます。

「ドツテドツテ  
ドツテド

二本うで木の工兵  
隊

六本うで木の龍騎  
兵

ドツテドツテ  
ドツテデド  
いちれつ一萬五千  
人

はりがねかたくむ  
すびたり。」

どうゆふわけか、二本  
の柱がうで木を組んで、

びつこを引いていつしよ  
にやつてきました。そし

て

▽…いかにも…△

つかれたやうにふらふら  
頭をふつて、それから口

をまげてふうと息を吐き  
よろよろ倒れさうになり

ました。

するとすぐうしろから  
来た元氣のいいはしらが

どなりました。

「おい、はやくあるけ  
はりがねはたるむぢや

ないか。」

ふたりはいかにも辛さ  
うに、いつしよにこたへ  
ました。

やくちやになつてゐ  
だ」

うしろのはしらはもど  
かしさうに叫びました。

「はやくあるけ、ある  
け。」

きさまらのうち、どつ  
ちかが参つても一萬五千

人みんな責任があるんだ  
ぞ。あるけつたら。」

二人はしかたなくよろ  
よろあるきだし、つぎか

らつぎと

▽…はしらが…△

どんどんやつて来ます。

「ドツテドツテ  
ドツテド

やりをかざれると  
たん帽

すねははしらのご  
とくなり。

ドツテドツテ  
ドツテド  
肩にかけたるエボ  
レット  
重きつとめをしめ

すなり。」

二人の影ももうずうつ  
と遠くの緑青いろの林の

方へ行つてしまひ、月が  
そらに雲からばつとでて

▽…あたりは…△

にはかに明るくなりまし  
た。

でんしんばしらはもう  
みんな、非常なご機嫌で

す。恭一の前に来ると、  
わざと肩をそびやかした

り、横めでわらつたりし  
て過ぎるのでした。

ところか愕ろいたこと  
は、六本うで木のまた向

ふに、三本うで木のまつ  
赤なエボレットをつけた

兵隊があるいてゐること  
です。その軍歌はどうも

ふしも歌もこつちの方  
とはちがふやうでしたが

こつちの聲があまり高  
いたために、何をうたつて  
ゐるのか聞きとることが

出来ませんでした。こつ  
ちはあいかはらずどんど  
んやつて行きます。

「ドツテドツテ  
ドツテド

寒さはだえをつん  
ざぐも

などて腕木をおろ  
すべき

ドツテドツテ  
ドツテド

暑さ硫黄をとかす  
とも

いかであとさんエ  
ボレット。」

どんどんどんどん  
やつて行き、恭一は見て

ゐるのさへ少し

▽…つかれて…△

ぼんやりなりました。

でんしんばしらは、ま  
るで川の水のやうに、次

から次とやつて来ます。  
みんな恭一のことを見て  
行くのですけれども、恭  
一はもう頭が痛くなつて





## 子供の科擧

### ハマナスの話

杉村 松之助

ずつと早くのことです。私は宮城縣の米川小學校にいつたことがありました。小使さんに名刺をたのんで出さうとおもつて裏の方へまはりました。そしたらお庭にハマナスが丈高くのびてゐるので私はちよつと驚きました。おや、此の花がこんな

所に咲いてゐたのか知らずとおもつて。米川小學校は隨分の山中で、岩手縣の東磐井郡の山奥と春中合せになつてゐるところです。

「あ一二、あ一二」と號令をかけてやつて來るのを見た。列のよこをせいの低い顔の黄いろなぢいさんがまるでぼろぼろのねづみいろの外套を着て、でんしんばしらの列を見まはしながら

「あ一二、あ一二」と號令をかけてやつて來るのを見た。

△……みられた……△

柱は、まるで木のやうに堅くなつて、足をしやち

な花が咲く其れが不思議でならなかつたのでした

聞いてみると、石の巻へ旅行をしたとき探つてきたのだとかいつてゐました。尤も花といつても私の往つたのは十一月の半ばごろでしたから、花が咲いてゐなかつたのです。その代り大きな赤い實がどつさりついてゐて、花ざかりのそれがしのばれてならなかつたのです。

其の後わたくしの石巻に旅行したのです。それは六月のはじめでしたが、場所は石巻から渡波へ行く途中でした。

ほこばらせて、わきめもふらず進んで行き、その變なぢいさんは、もう恭一のすぐ前までやつてきました。そしてよこめで

しばらく恭一を見てからでんしんばしらの方へ向

途の右にも左にもハマナスの花が、きれいな

れなぬの色を見せて咲きほこつてゐました。愉快でしたよ。

ああハマナスといふと大抵青い時に鹽漬にする二錢銅貨大のくびり目のあるひらつたいトマトの在來種をいつたものです。花巻邊でハマナスといつてゐるのが、茄科（ナスクワ）の植物で、漢字では蕃茄と書くのですが、私のこゝでいつてゐるのは、薔薇科（バラクワ）の植物で漢字では、玫瑰と

「なみ足い、あいつ。」と號令をかけました。

そこででんしんばしらは少し歩調を崩してやつぱり軍歌を歌つて行きました。（つゞく）

書くのです。

幹も葉もバラの花に、よく似てゐます。バラの花といつても春にも夏にも秋にも、鉢や花壇で咲くバラではなく、やはり六七月ごろですが、野や山や途端などに、よくヤブをつくつてブンといゝ香りを出して、白いたくさんのお花を見せてゐるのをいつたのです。此のバラは學問上ではノイバラといふのですが、ハマナスはこのノイバラに似てこれよりも、もつと花も實も大きいのです。こ



これは名が示してゐるとほり濱の花です。海濱の植物です。それが山奥に結構よく咲いたあとがあつたので、私は驚いたのでした。

しかし、よくあるいてみると犬も棒にあたると今年十月のさう手帳を見たら十六日でした。和賀郡の田瀬で、ハマナスの自生を見付けました。それは小倉築の附近でしたが、試みに其の邊の人だちに名前を聞いたところ「ナニこれはただのバラでござす」といつて別にかへりみもしなかつたのです。「イヤこれはただのバラではないですよハマナスといふもので、本當いへばこれは濱の花で、バラの格好がしてゐるんだが、バラよりも花も實もずつと大きい筈です」

といつてやつたら「なるほどさういはれてみれば大きござす」といつて、互に其の植物を見なほしたのです。

見るとヤブの大きいのは二メートル四方もあるやうで、花さかりにはどんなに奇麗であるかわからん位でした。こゝよりすこしへだて、他にも二三ヶ所に自生してゐるのを見付けました。そして、その村の有力な方から「それなら、立札を建てゝおきたいが、何とか文句を認めてくれませんか」といはれたので、それではと、帰宅後、おほよそ、次のやうな文句を書いて郵便であくりました

は海濱の植物で、こんな意味のでした。たゞな所に自生してゐるの珍らしいことで、學問上研究のたねにもなるといふことですからお互に、大切に保護することにしたしませう。

文句はハッキリと覚えておませんが、なんでもこのまゝで、

(昭和三、一一、一八)

# 辯論講話

(1)

## お話について

(黒澤尻町)

### モトチ生

面白かつたと思ふ話を初めてきいたのは、尋常三年の時、天野雄彦先生が、豊臣秀吉が日吉丸と云つた時のことを身振り手振り可笑しく話されたことでありました。その時先生が、一番初めに云はれた言を未だ覚えてゐます。

私は天野雄彦の尊と云ふ偉いお話の神様であります。と云はれました。最初に斯う云ふやうに聴く者に面白さうだな、爲になりさうだな。と思ふ言をもつて話されると、誰でも眞面目にさく氣になると思ひます。

學校で校長先生が式の時、何時も私は思ひました。何んだかわからない難しい言で今日は何々の日であるのである。なあんて話されたら、早く校長先生の話が終ればよいと思つてわき目などしてよく式が終つてから受持ちの先生に叱られたものであります。私はその時私より校長先生のお話の下手なのが悪いと思ひました。

優しくよくわかるやうに話して下されば、私だつてそんなにわき目をしてたりいたぢらししないでせうに。

初めて私が演壇の上に登つてお話をしたのは尋常四年の春の學藝會であります。



よく覚えてゐませんが、乃木大將の息子の勝典、保典の兄弟が小さい時冬になつてもお父様から火鉢を興へられないので、乃木式火鉢と云つて相撲をとつたと云ふ話でもつたと思つてゐます。

「ドタンバタン兄弟は座敷の真中で相撲をとりました。」と中頃まで話したらすつかり忘れて随分赤くなつて立つてゐて又思ひ出して續けました。

私の近所に武徳殿があつて毎月雄辯會の人達がそれこそ天下を取つたやうな大きな演説をしてゐたのですが、聴く人がないので私共のやうな小さな子供が行つても喜こんで煎餅をくれたり、密柑をくれたりするのて、よく行きました。

その頃の私の先生もよくその雄辯會で話してゐました。何時か私にも出ないかと云はれたので、この次と約束しそれから一ヶ月一生懸命乃木大將のドタンバタンを練習してその次に出る積りで行つたら先月私に出るやうにと約束した幹事の人が出ることも何んとも云はない。

私から出たいと云ふ元氣もなし、とう／＼出ないで仕舞ひましたが、あの時ずる分がつかりしました。十年も経つてからその人にその時の話をしたら、子供にはうっかり約束が出来ないものだ。」と、その時のことを悪いと思つてゐられました。

それから私は毎年學藝會に出てお話をしたが、

大い聲は大きかつたり蚊のやうに小さかつたりで失敗しました。

それから私は、よく色々人の話をききましたが一番最初にきいた天野先生の話位上手だと思ふ



## 童話

### ジョンゲール少年

小田島 柏 龍

(一)  
昔々或る所にコムスと云ふ小さな、そして平和な國はありました。その國の王様は極めて賢いそしてやさしい王様でありましたので、國の人民は大そう喜んで働きました。ですから國は大そう金持でした。この位平和な國として金持な國でも、只一ツ困つた事はありました。それは王様にはお子さんはありませんでした。

話をきいたことがありません。これからきいて面白かつた話、話して失敗したことを、ボチ／＼この欄にかいてみたいと思ひます。

五六日ばかり経つての事でした。三人の重たな家來等を集めて、相談の會は開かれました。それは、廣く國中から王様の相續人をお選びになることでした。そのことは決まると皆んな家來達は歸つてしまひました。

それから一ヶ月ばかりの後は、國中何處の町にもたてふだは立てられませんでした。此の立札を見た町の連中は大騒ぎでした。◎「なんだこいつア・エート」△「バカッ!もつた」ない奴だ、これは我等の國の王様の有難い言葉だぞ。」と云ふ調子で皆んな、一々禮をしてそれから讀み始めるのでした

(二)  
これ程王様を尊んで居りましたこの立札の内容はかうでした。此の間王城近い深い



池に、王様の大切な寶物を落したによつて、池の中にくゞつて行つて、寶物を尋ね廻る七八歳の子供を五人ばかり入用なのだ。望みの者は直ぐ王城に近い建物に集ること。但し十日以内のこと。各大名

と記してありました。

所が或る町はづれに貧乏な、そして父母を失つて祖父に育てられてゐる七歳の子供はありました。この子供は、町中でも孝行な子供として賞られて居たのでした。子供は、感心なことには、パンを幾つか買つて来て、それを賣つてはそのくらしをたすけて居りました。

## (四)

今も皆んな賣つて家へ歸つて來ましたが、いつも歸つて來る筈の祖父さん

は歸つて居りません。祖父さんは、パン屋の職工として働いて居りました。

パン屋の主人は大そう親切で又おとなしい人でしたので、祖父さんを大そう大事にして居りました。しばらくして祖父さんは歸つて來ました。その時にはもう子供は夕飯の仕度をして待つて居りました。祖父さんは平常よりも一そうニコ／＼顔でやつて來ました。「オット皆さんにネー子供の名を忘れて居りましたネ。子供の名前はデヨンダール、と云ひます。」「デヨンダールさんも大そう喜びました。そしてたのしく夕飯を食へました。今日の働きぶりなんか話合つて喜んで居りましたが、祖父さんふと、祖「オーソーダ／＼」と思付いたやうに、今の出來事を頼

笑ながら話出しのでありました。

## (五)

パン屋の主人はいつもの出張先から歸り路、例の立札を見たのです。主「オーこれは善い事だヨシ。」と心の内で喜んで立札を拜んで歸つて來ました、家へかへつて見ると、職工等は歸へる所でした。色々支度をして居りました。ゲール爺は居りました。主人「ゲール爺は何處に行つた。」「未だ働いて居ります。」「オウそうか、感心だな。」かうして爺は皆んなよりも遅く歸つて行くのは常でした。

しばらくして、爺は主人の室に呼び出されました。主「實は貴多を呼んだのは、外でもないのですが町の中央に新しい立派な立札は立つて、その立札

に、此の頃ツノ王城の近い深い池にネ、寶物を落してしまつた。

## (六)

そこでその寶物は王様のもので、世界に唯一つと云ふ物ださうでネ、七八歳の少年は入用なさうで、誰か望の者は申込めとのことで、十日以内なさうでネ、それで貴多の少年をなんとかこの寶物をさがすにやつたら。それは王様の爲やがてはこの世界の爲にもなるのだがどうです。やる氣になれぬのですか。」と國の爲は、王様の爲これ聞いた爺は、「うんそうだ／＼國

の爲、王様の爲なら例へ大切な孫なりとも犠牲にしませう。私はやりまします。主「さうですか、それで私も安心しました。では歸つてお休みなさい。」

彼の爺は悲しみの中にも喜の色は顔にあふれて居りました。爺の頭の中には、三年ばかり前の事をマザ／＼と思ひ浮べるのでした。

## (七)

三年前に、ジョンの父母は二人共ふとした事から病にかゝりとう／＼死んでしまひました。その時お葬式を出す金さへもありませんでした。二人に出す藥代もろくに出せなかつた、爺はどうして葬式の金を出すことは出来るであらうか？

爺も困り果て、色々心配をして居りました。所が、そのことは王様にお聞えになりゲール爺にお金や色々物の物をたくさん下さいました。かうして私のやうな貧乏人をば救ふ王様の有難、さこれを思つてゲール爺は、一王



様の爲ならば。」と思つたのです。長い——此の話をつつと聞いて居たジョン少年は、勇敢にも「ヨシッ、私は行つて必ず王様の寶物を探し出して参ります。」と、その顔には眞實の色はあふれて居りました。幾日か過ぎた。

(八)

王様の前には、ジョン少年外五六人の少年皆眞實な、そして勇敢な少年は立並んで居りました。王様はニコ／＼顔をして第一回の質問は下されしました。「皆さんの心では寶物をどうして探したさうとするのですか。」と、お聞になりました。少年達「私は水泳が出来るので、如何に深い池なりとも、探出して御覽に入れます。」と、勇敢に腕をさしつて居る少年もありました。皆様々でした。ジ

ョンゲール少年は「私は眞心を持つて必ず——やう通うし、王様の爲、國の爲ならば一身を投げて探し出して御覽に入れます。」と言放しました。王様はこの一言は聞きたかつたのでした。

(九)

ジョンゲール少年は、この一言をもつて王様の相續をすることになりました。王様の主人も「池の中に入るは愚か、王様の相續人を選ぶのとは全くおどろきましたネー」二人の顔には、喜び様子はみなぎつて居りました。七才から學問をし、武術を習つて幾年かの後には平和な國王として、國民の信用を受け、王様の机に向ふことは出来ました。

(完)

## 家庭一週一題

### 或る母の苦心談

和賀郡土澤町 一 女性

學校で始めて地理を教へられた。授けられる場

合に、特に先生に御願致したいと思ふのは、地圖上での方角の觀念であります。此の觀念が餘程しつかり兒童の頭に描かれてゐないと、先生が何々川は北から南に流れてをるとか、何々山脈が東北から西南に走つてをるとか、東南は平野で西北は山岳であるとか、先生はどんなに御熱心に、お上手に御話されても、子供等にはそれこそ馬耳東風といった様なことになりはせぬかと思はれます。素より私は教師としての経験は全くありません。

出來てゐないことで數字を唱へたり物を數へたりするに單に機械的にするに過ぎなかつたのであります。例へばお金の様なまるいもので之れは五つであるとか六つであるとか教へてをうて今度は四角又は三角なもので同じ數を數へてさつぱりわからぬ。又青い物で數へてあつたのを今度は赤い物で教へれば矢張り同様であります。そこで同じ物を數へるにも横に並べたり縦に並べたり斜に並べたり色々な位置に並べて勘定させたり、大小を取交せて計算したり、右から左の方へ數へさしたりその反對にしたり、上から下に數へさしたり下から上にさしたり、色々な色を取交せて計算さしたり形の異なるものを色々取交せて數へたり色々な方法で苦心して兎に



角数の觀念を構成する様になりまして、それからはお勘定の成績は普通にまでなる様になり現に盛岡高等女學校に在學中でありますが總ての學科の内では數學に一番興味を有つてをります。小學時代は放任して置く方がよいとか悪いとかの話はつゞ／＼承はります。自分のつまらぬ経験からすれば全然の放任がいけないと思ひます。子供の性質や能力に應じて或る程度の干渉が必要と思ひます。之れに就て自分ばかりいふ経験を持ちてゐます。子供等は餘りいふことをきかなかつたりいたづらをした場合に一室に押込めてゐたことがありますが長男をさうすると泣きながら色々理窟を述べて折角御説をするのであつたが次男になると唯オイ／＼

とひた泣きに泣いてをったが、おしまひには泣疲れて眠つてしまふのでありました。三男になると室内で亂暴して室外にあられ出ようとするのでありました。その性質（兄は理窟屋、次男は暢氣三男は荒つぽしい）は今に尙明かになつてをります。ですから學業の方でも仕付の方でも其の干渉は随分と子供のたちを見て適當にせねばならぬことを痛切に感じてをります。

## 欄 教師

クレエヨン  
習字

岐阜縣梅林校の  
試み

一 記者

岐阜縣梅林小學校では先般クレエヨン習字といふ新しい試みを始め一年生から三年生の學童に教授

し非常な効果を收めたので過日市へその成績を報告した同校では毛筆習字は三年生からでないとい課せないことにしてゐるのて一二年級の兒童がとかく粗雑に流れ勝ちになりこれが將來に及ぼす影響の大きいのに鑑み毛筆書方への楷梯としてクレエヨンにする習字手本をつくり生徒に練習させてゐるがクレエヨン書方にする手の運動は毛筆書方の運筆方法によく似てゐるので鉛筆石筆などの硬筆書方に比べて最もよく毛筆書方の筆勢を表現することが出來非常に好都合だと言はれてゐる。

## 現代思潮 教育方針

花巻川口町

花城小學校

現代思潮の影響としては良い所は勿論澤山あるが惡影響も決して少くはない。元來我が國民は權利はよく之れを主張するが義務は可成これを免れんとする傾向がある。而して現代の思潮に於ても自分等の都合のよい所ばかりを採り其の爲さねばならぬ

そしていふには若し此の工事に日本人を使つたなら二ヶ年半の日数は確に延びるとこの一例を以ても解ることである彼の安南ビルマベルシャなどは何れも文明の中毒にあひ權利は果てしなく主張し義務はなるべく之れを避け既に滅亡に頻してをる國である。教育も亦此の範圍を脱することが出來ない。何れも自由を主張するが規律秩序を無視せる動物的自由を以て眞の自由と曲解してをる。トルストイの無制裁學校に於ては授業中喧嘩をする者あり、出て行く者あり全く兒童の自由に任してゐるが、それで立派に成功してをる。

吾々はトルストイの人格なく修養なくして無制裁



学校の經營が出来るであらうが唯其の形式ばかりを真似したならば由々敷問題を惹起すであらう。成城の或る參觀人は生徒が窓から出入するのを見て非常に感じたといふことである。これも同様である我々は小原先生の抱負なく自信なく其の真隨を了解することなくして唯單に其の形式ばかりを真似たならば兒童を毒すること甚だしいものである。

らう。吾々は兒童の個性を重んじ兒童の自治を重んずるは理想とするところである。夫れ故に兒童の本能に根ざし大人になれば自然消滅する行動で他人の妨害にならず道徳上有害でない限りは束縛を加へない。小供らしくのんびり育てゝ行きたいのである。(未完)

美しい企て  
記念植樹  
花城校で  
花城小學校では御大典記念に植樹をする事になつてゐましたが十四日の大嘗祭日を期して校庭の南側に色々の樹木を植ゑました、これは千五百餘の全校兒童が各三錢づゝを献金して企てたもので美しい記念として、いつまでも残ることとてごさいませう。

花城校の光榮  
國民新聞社の主催でこん度東京の上野公園で開かれました御大典記念全國兒童成績品展覽會に稗貫郡から花城小學校尋六松岡シズ子の圖書と高一小原なほ子の裁縫とが入選しました、そして長くも陛下の天覽の榮を賜りました。

各校のうるはしい  
御大典記念事業  
稗貫郡花城小學校では二十六七日頃高等科を四組にわけて珠算の競技會を行ふ筈ですが審査の結果三等賞迄本社からメダルを送る筈です。  
和賀郡成田小學校では御眞影の奉安庫を建ました稗貫郡矢澤小學校では御眞影の奉安庫を建ました

### 學校通信募集

童謡に就いて (3)  
子守  
家の裏のへいぎはで  
子守たちが遊んでた  
黄色いむしろに坐つて  
坊やをだましましたし  
遊んでた  
(豆の兄弟より)  
子守たちは、子守たち

高橋芳夫  
どうして、よく遊んでゐるのを見ますこの童謡にあらはれた子守たちの様子をよくみませう。子守達は、何をして遊んで居るでせう。坊やたちをお雛様でも遊べるやうに、竝べて遊んでゐるかも知

れませんよ。なんだか子守達の賑かな笑顔と、可愛らしい坊やの顔とがびつたり合つて、「ほら、坊ちゃんこつち」なんて手を叩いてうれしがつてゐる。  
子守たちの優しい心が思はれます。  
心から微笑みつゝ讀まれる童謡です。

よく見る事です。人の見えない所で、いゝえ見てゐる所でも、おんぶされるのもあきてかよく泣く兒を、「泣かねえんだ、泣かねえんだ」とか言つて、頭で、背の兒の顔を打つ亂暴な子守がありま

す。こんな子守を見る度心さびしくなります。  
みな様方の學校の出來事や催し等に關する御通信を御願ひ致したいと思ひます、例へば學藝會をやつたとか、運動會をやつたとか遠足をしたとかどんな少さい出來事でも御知らせくだされば誠に有難いこととてごさいます、これは先生様方ばかりでなく生徒の方でもかまひません。





# 童文苑

演習

稗貫郡南城校三年

岩間三夫

おととひ演習があつた。僕と照男君と見に行つた。グラウンドへ見に行つた。兵隊さんは、けんつきつけてあちら、こちらをはせあるくあちらで野砲どんとなる、こちらできかんじゅう

ばちばちばち。

▲評 あの大きな演習を、こんなに小さくまとめたのは、えらいことです。

## 春の夜の思出

和賀郡土澤校

菊池八郎

川の方で淋しさうに鳴いて居る鳥の聲が聞える。静かに耳をすまして聞くと、思ひ出深い川スギの聲だ。空を見ると月が膝にかすんで、其の邊りを

白い雲や、黒い雲が走つて、何んだか氣味が悪いこんな夜にあの川スギの聲を聞くと、小さい時のことが懐しくてたまらない。それは、今晚の様な氣味の悪い夜だつた。

……

僕は其の當時まだ尋常科に入つて居た兄さんと魚を捕へようとして川に行つた。しかし其の時はまだ五月の初め頃でもあつたし、又月も出て居るので魚捕りには少し早すぎた様だつたのでさう遠くへは行かないで、近所を見て歩くことにした。僕には初めてのことであつたし、又まだ小さい。一種の不安と嬉しさをいだいて兄さんについて行つた。カンテラの光をたよりに、先づ第一に水に入り易い所に行つた。そこは川岸の道から下りられる所で小石が澤山有つた。そして其の傍にたけの二

尺位の柳が一かたまりになつて岸の方まで續いて居た。その小石の所に行つた時、不意に傍の柳の茂みから小鳥が一匹ちよこ／＼とかけて出た。

……

僕は不意に小鳥にかけ出られたので、何んだかおそろしくなつてきたが初めて夜、川などに來たので好奇心に捕はれて、兄さんの止めるのもきかず、其の小鳥を追つて容易につかまへた。何しろ生れて始めて僕が一人でしかも小さい時に鳥と言ふものをつかまへたので嬉しさは大きいものだつた。その小鳥をしつかり

とつかまへて、カンテラの光で見ると、小鳥は小さい可愛い、目をバッチリと開いてこつちを見て居る。其の日には恐しさ

があり／＼と現れて居た。しかし僕は一向そんなことを思はないで、捕へた

が懐しくてたまらない。

▲評 其の時の君の悲しさは、捕へた時の嬉しさの何倍でしたらうね。

◇

錢をなくして

和賀郡黒澤尻校

餘目みや

今日のさがりに校庭さうぢでした。私は先生から綴方をもらつて教室に來てカバンにその帳面を入れて居ると〇〇さんは怒つたやうな聲で「おまへえつとも校庭掃除をしなえや」といつて、にらめるやうに私を見ながら教室掃除をしてゐた、私は〇〇さんをにらめながら階段を下りて行つたが入口から庭を見ると皆がほこりだらけになつて掃除をしてゐたが、なんだか恥かしいやうな氣がして庭へ出て行けなかつた、だまつて入口の所でうろ／＼してゐたが、だんだんに時がたつてから皆が教室にはいつて來た。私

は嬉しさで心が一ぱいだった。早く家に歸つて鳥籠に入れてやらうと思つて魚捕りはそつちのけにして、兄さんにせがんで、小鳥をしつかりと握り、おど／＼しながら家に歸つた。そして其の小鳥を家の人に見せると、川スギといふ鳥だと言ふ。又こんなものを捕へては可哀さうだ、逃してしまひなさい、と言はれたので兄さんは逃して來た。其の時の僕の悲しさは捕へた時の嬉しさの大きかつただけまた大きいものだつた。

……

その後、度々小鳥を捕へた所に行つて見たが、前の様な小鳥は一匹も見あたらなかつた。

この思ひ出深い川スギの聲。しかも淋しい夜に淋しさうに鳴くとは。

あの川スギの聲を聞くと僕は一層あの當時のこと



も皆のあとについてはいつて行つた。

……◇……

教室の窓から運動會に出る選手達が走るのを見てゐると佐藤めさんが私に同級會にかした五銭をかへした、私はそれをとつてから何分かつて家に歸らうと思つて廊下に出たが錢を落しては六日の日に見に行かれないと思つて筆入れをあげて入れようと思つて、ふたを開けたら一圓三十錢入れてあつたのが、一圓十銭しかはいつてゐなかつた私はびつくりして走つて教室へ入つて来て「ぜにこ二十錢なくなつた」といつて人の机の上にカバンをみんなあけて筆入れもあけて見たがなかつた窓からまがつて（のぞいて）見てゐた人達は（あら）とさげんで私の方を見て「二十錢どこさいれてらのすや？」といつた

……◇……

こんどは自分の机の中を見たら何もないつてゐなかつた。はいつてゐるのは少しばかりのゴミがすみの方にくつかつてゐるだけだつた。皆は「先生ペン入さあし入れておくなつてゐたけんちえ。ペン入れだればせんまとりやすんだから」といつた

……◇……

私は「二十錢ばかり取つたつて誰さまだまてればう。」といふと人が「さわげばとつた人がつら赤くしてだすんだからさあけ

……◇……

ばえんだ」といふ人もありました。私は皆に「あら町さ行かねえばなえから……」と買はねえばなえのやつた。あらぜにつてなくしたから買なえ

……◇……

た話をするとお母さんに叱られるので「出る時は出るだし、出ないときは出ないだ」とあきらめて家に歸つた。

……◇……

た話をするとお母さんに叱られるので「出る時は出るだし、出ないときは出ないだ」とあきらめて家に歸つた。

……◇……

た話をするとお母さんに叱られるので「出る時は出るだし、出ないときは出ないだ」とあきらめて家に歸つた。

……◇……

た話をするとお母さんに叱られるので「出る時は出るだし、出ないときは出ないだ」とあきらめて家に歸つた。

# 秋の雨

稗貫郡好地校 渡邊 秀生

さう／＼と降つて来た秋の雨、風もないのに木のはが、おちて来る雨にゆられておちて来る、学校のいろ／＼の木も次第々々に黄色になり、赤くなり、雨は学校の庭をさら／＼と洗つて居る。

僕が今日學校に来る時、

お寺の木のはがたくさん

おちて居ました。僕があ

るくたびに、かさ／＼と

なるのです。

雨はまだやみません。」

▲評 ほんたうに、秋の雨は、か

うしたものです。よくあらはれ

てゐます。



◇  
きのことり

和賀郡輕井澤校六年

小 原 等 子

一昨日の事であつた。先生は『四時間目にこの時間をお話の時間にしますか、それとも近くの山にきのことりに行きませう。』とおつしやつた。皆

は一せいに大聲をあげてきのことりがよいとこたへたのでそのことにきまつた、休の時間にはもうきのことりの話でもちきつた。鐘が鳴つてやがて先生の號令であるき出した。皆喜び勇んで出掛た

先生はとある山に連れて行かれて『近所にゐるなら何處にゐてもよい、笛がなつたら集ること』とおつしやつて別れた。二

三人づゝかたまつて思ひ／＼の方向に向つた。あなたをなたと探し廻つて一つでもみつけたときのうれしさといつたらと

てもなかつた。

こうして一時間位もたつた頃遠くで笛の音がした

急いでかけつけた、きのこはみんな先生にあげた。アミノメが一番多かつた。

▲評 みんな先生におあげになつた。美しいお心がけですね。アミノメが多かつたといふのはあなたの御謙遜でせう。

母の死  
稗貫郡湯本校高一

菊 池 ヒ サ

私はまだ五才の時でしたふとしたかぜからお母さんは死んでしまひましたお母さんが病氣でねて居る時私も病氣でねて居ましたお母さんが死んだ時私はおばあさんにだかれてこたつに顔をあてゝ泣きまじしたおばあさんは私があまりなくの寝床につれて行つてねむらせやうとしたさうですが私はお母さんをしたつてねなかつたさうです、そして

死んだお母さんに入つてねた事が今でもかすかにおぼえて居りますさうして二年ばかりたつてから別なお母さんを迎へましたその人は大さう心の良い人でしたがある事情から離縁してその年の中に又別なお母さんを迎へました私の位お母さんをた

くさん持つた人はなからうと思ひます、今のお母さんは三度目のお母さんです。

夜星のよい晩に外に出て見るとキラ／＼と大きく光る星を見て死んだお母さんじやなからうかと思ひます、小さい時「死んだ人は星になる」と言ふことを聞いて居りましたから(完)

▲評 大きく光るお星さん、はそりや、あなたの死んだお母さんかも知れませんね。

死んだお母さんに入つてねた事が今でもかすかにおぼえて居りますさうして二年ばかりたつてから別なお母さんを迎へましたその人は大さう心の良い人でしたがある事情から離縁してその年の中に又別なお母さんを迎へました私の位お母さんをた

くさん持つた人はなからうと思ひます、今のお母さんは三度目のお母さんです。

夜星のよい晩に外に出て見るとキラ／＼と大きく光る星を見て死んだお母さんじやなからうかと思ひます、小さい時「死んだ人は星になる」と言ふことを聞いて居りましたから(完)

▲評 大きく光るお星さん、はそりや、あなたの死んだお母さんかも知れませんね。

今 朝  
和賀郡谷内校尋六

小 原 信 一

私は今朝起きて見ると東の空はほんのりと白んでゐました。まもなく雞の聲は朝の静けさを破りました。

僕は弟と二人で裏山に栗拾ひに出かけました、次第に明るくなつて來ます栗林についた頃はお日様が東の山から出ました。朝露がしつとり置いてゐる所へ朝日はやはらかな光をおくりますとあつちこつちでさら／＼とひかります。時々さわ／＼風が吹いてきてぼたり／＼露をおとしまします、栗も時々おちまします。栗がはきこに一ぱいになりました二人で家に歸りますと六時でした。

私は毎朝弟と二人で栗拾ひに出かけます、今朝でちようど一斗樽に一つになりました。

かうして朝早く起きていゝ空氣の中で栗拾ひをするのが此頃の楽しみです

▲評 子供の時は、夜は早く寝て朝は早く起きるくせをつけたいものです

私は今朝起きて見ると東の空はほんのりと白んでゐました。まもなく雞の聲は朝の静けさを破りました。

僕は弟と二人で裏山に栗拾ひに出かけました、次第に明るくなつて來ます栗林についた頃はお日様が東の山から出ました。朝露がしつとり置いてゐる所へ朝日はやはらかな光をおくりますとあつちこつちでさら／＼とひかります。時々さわ／＼風が吹いてきてぼたり／＼露をおとしまします、栗も時々おちまします。栗がはきこに一ぱいになりました二人で家に歸りますと六時でした。

私は毎朝弟と二人で栗拾ひに出かけます、今朝でちようど一斗樽に一つになりました。

かうして朝早く起きていゝ空氣の中で栗拾ひをするのが此頃の楽しみです

▲評 子供の時は、夜は早く寝て朝は早く起きるくせをつけたいものです

天氣の日(童謡)  
和賀郡土澤校尋六

平 野 定 助

空が青いよ。  
田の水が光る。  
草も木も、  
學校の屋根が、  
さらりと光るよ。

青田の中の  
本道を、  
馬が通る。  
人も通る。  
みんな白く。  
光るよ。

▲評 クレイヨンを持つて、文をたどつてねれば、繪になります

朝草刈り  
稗貫郡八幡校高二

似 内 龜五郎

夏休みの或る朝、時計の打つ音に目がさめた。母は「一時だぞ」といつた。急いで起きて外へ出て見

▲評 子供の時は、夜は早く寝て朝は早く起きるくせをつけたいものです

天氣の日(童謡)  
和賀郡土澤校尋六

平 野 定 助

空が青いよ。  
田の水が光る。  
草も木も、  
學校の屋根が、  
さらりと光るよ。

青田の中の  
本道を、  
馬が通る。  
人も通る。  
みんな白く。  
光るよ。

▲評 クレイヨンを持つて、文をたどつてねれば、繪になります

朝草刈り  
稗貫郡八幡校高二

似 内 龜五郎

夏休みの或る朝、時計の打つ音に目がさめた。母は「一時だぞ」といつた。急いで起きて外へ出て見



れば、東の空はかすかに白い。いざさらばと馬を出し荷ぐらをさせた。次に砥やいろ／＼の道具を揃へ先づ飯を食べた。食べをへてから草鞋をはき馬に乗った。門口を出て見ると何處のうちでも寝てゐる。唱歌をうたひながら勇み立つて行つた。一番目の小川をこえた。所が北風がすう／＼と顔といはず手といはず吹いて行く。間もなく野についた。

見るとお日様も出る所だ向ふの岡で刈る人もあるし、こちらの森で刈る人もある、僕の様に平らな所で刈る者もある。刈る場所は一様でない。間もなく四把刈つた。日光に照らされながら露を落しながら一生懸命に刈つた。六把刈つた。刈り終つて道具を揃へ馬をつれて来た。少し休んで馬につけた。ずるぶん重かつた。つけ終り馬をひき出した。少し来ると隣のおぢいさんが馬をひいて来て『五郎さんお早よう』といった。僕もいつた。うちに歸り馬からおろし馬を手入して馬屋に入れた。砥や鎌もちゃんと収めた。

馬は喜んで疲れも忘れた様な様子で食べてゐる。

◆

ミヨケチ  
稗貫郡花城校一年  
澤田 トシヲ  
アカンボハアベワルクテ  
ネテキマス。クスリヲノ  
マナイデダンダンニワル  
クナリマシタ。トシヲト  
ミヨケチトケンカヲシテ  
トシヲガオカシヲカツテ  
クルトミヨケチガキテオ  
カシヲケロケロテオカア  
サンニマイニチイヒマス  
ミヨケチハネボスケダ。

ハトヤサルナドタクサン  
キマシタ。キノフノエン  
ソクウレシイナ。

昨日のお休み  
稗貫郡花城校三年  
菊池 忠 介  
朝早くおきて遊んでゐると、魚屋の正さんと新吉さんが来て『明士さん、よつちやん』といひました。

と話をしました。そして小屋にいつてはいのりを造りました。

するとだんだん日が高くなりました。

そこへ昨日ぢん取でけんくわをした、たつちやんが来ました。そして『明士さん白と赤の旗を持つてくるから私がかせてずや』といひました。僕も皆なもかぜるといひました。私もてつばうやさまざま造りました。

そして演習をしました。

春  
和賀谷内校尋五  
葛西 静 夫  
青々とした麥畠には蝶々が麥から麥へとひらひら飛んで行く。やはらかい春の光は照つてゐる。すみれ、たんぽぽ、つくしよもぎ、は喜ばしくずんずんのびて行く。又山には薄緑の若芽がふさふさと風にふかれて、をどつ

▲評 君のやうに、勇敢に働く人があるの、日本は世當強國の一つになつて居れるといふものだ。



子供の力

てゐる。時々ばたばたと山鳩が飛んで行く時もある。所々でホーホケキョーと鳴く鶯の聲が聞える。遠足も春はいい。ぜんまいや、わらびもあと少しで出るだらう。節句もすんだ。梅や櫻も咲いてゐる、又春は一番勉強の出来る時である、仕事はすんずんすゝんで行く学校の窓から遠を見ると薄あをくかすんで見える。山とちがつて又川も美しい、水はさきもちよく流れてゐる、山も川もまけずに美しい。

夕方

和賀郡土澤校尋六

菅 興 榮 司

西に日がかたむきました杉や松は赤くなり空は夕焼になりました。どこからか、夕焼小焼の歌ふ聲が流れて來ます。空には何千匹とも知れないトン

ボがいつたり來たり飛んでゐます。子供等は竹をかついでせまはつてゐます。その中には八つになる弟もまじつてゐます。西向の山々は赤くそまり天地は皆赤くなりましたもうながめてゐる中に日はとつぶり西の山にしないでしまひました。群鳥はかあかあかなしさうに鳴きながら飛んで行きま

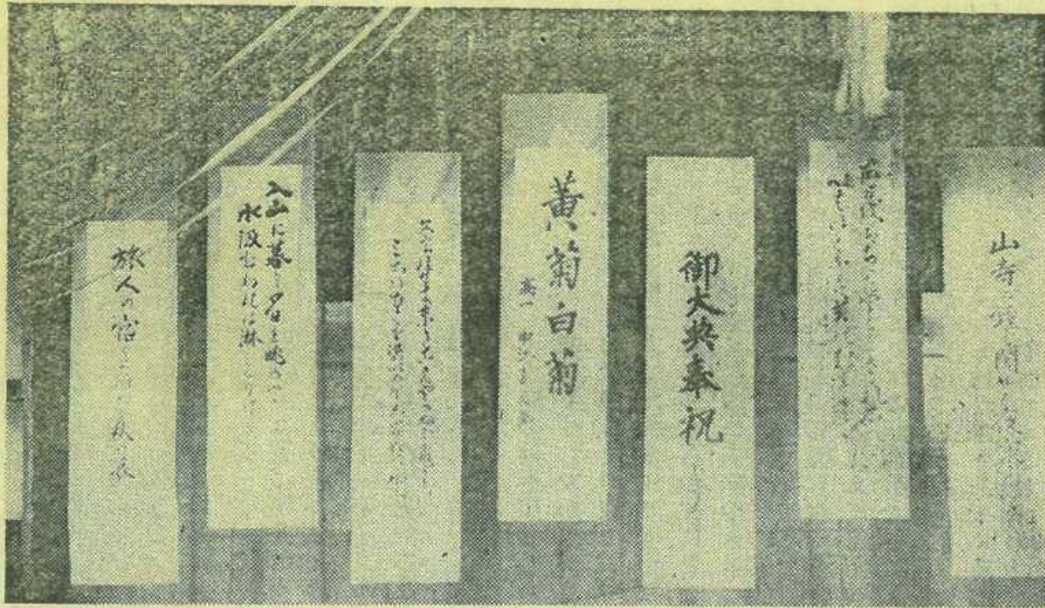
雨の日(童謡)

稗貫郡矢澤校尋五

富 庄 次 郎

青葉のさきに  
たまつた露  
人の足が  
びしゃ／＼するよ  
木の葉にあたると  
露が落ちるよ

兒童作品



すつばね上げて  
通る人

◆

農村の秋を報ずる文  
稗貫郡矢澤校高二

佐 藤 誠 一

何時の間にやら秋風身にしむ頃と相成候。憂なき僕の心は毎日楽しく面白く暮し居り候。静かなる秋にても我が農村は非常に忙がはしくまして人手の少き僕の家等にては毎日『てんてこ舞』を致居る次第にて御座候。仕事のおくれ勝なる我が村にても、もはや刈取もすみ、稲はせの三三五五に散ばれる所或は道路にそふて城壁を巡らせるが如く立並ぶ様は田舎の代表的なる好景にて候。又秋の山の美しくしく彩られし木の葉や草をふみわけて紅葉狩や茸狩をするのも興味の深きものに候。かねて御存じの僕の家



りになり夕方などは陽に映えて大そう美しく、ために色付きしかとさへ思はれ候。

本月二十一日は日曜日に候へば多くの友達と紅葉狩するも一興あらんと存じ候間御都合悪しからざれば御迷惑とは存じ候へども小生あばら屋までお出下され度御待ち申上候草々

## 赤とんぼ(童謡)

稗貫郡南城校三年

佐藤 貴三

赤いきれいな着物着て空を見上げてとんで行く  
すう／＼とんで行く

私が一びきとりたいたこつちのささとんでてきれいな尾をふりまして  
このささとまつたら私がおまへをとつてやらう

## 秋も酣になつて

和賀郡川尻校高二

山本 鐵藏

「チャラ／＼チャラ」川の水も何時しか元気がなくなつて春の流れの勇ましさは何處へやら。今は秋風に散る木の葉を乗せて南へ／＼と流れゆく。朝の霧、山々の木の葉、葉から葉へ落ちる露は一層秋の深さを思はせる。太陽の光、人の聲、足音すべては秋らしい。夜を通してうるさい程鳴いた虫の音も、今は何處へ行つたのか唯秋風が身にしむ静かな白霜の夜と變つた。

一風々と吹き来る毎に紅葉した葉は落花のひるがへるが如くに飛び散る様は實に美しい。何時しか庭は木の葉でいつばいになつてゐる。

小高い森に上つて里を見おろせば自轉車、自動車馬車、荷を荷ふ人、皆手

にとる様に見える。まだ明るいうちに走つたつた終列車も今では日暮に近くなつて日の短くなつたことを我々に知らせる如く、時々汽笛を鳴らしながら、さもつかれたらし

く大きな白い煙をはきながら勾配の急な線路をたどつて走る。後に棄てられた一抹の白煙は錦を着飾つた山に此の上もない調和した色どりを見せてゐる。

子供等のすきな『あけび』とり、栗拾ひも、もう過ぎて今はきのことりにいそがしい。

百姓家は稻かけに稻をかける。刈取つた田は我等にとつてのがしがたき遊園地となる。山に登る人里に遊ぶ子供等は如何に愉快かしら、女の子供は赤ん坊をおんぶして唱歌を歌ひながら、あそこの森、あそこの丘へとあそびまはつてゐる。

あゝのがしがたき秋よ、永遠にあれ。

## 月(童謡)

和賀郡輕井澤校六年

佐々木 清吾

(一)  
東の山から顔出した  
丸い大きなお月さん  
ほゝゑみながら  
しづ／＼上つて  
空高く

(二)  
銀のお室で餅つきの  
おうさぎさんが  
おどつて  
見てほゝゑみながら  
しづかに上つて空高く

(三)  
ついたお餅が銀の餅  
お月様に上げぬと  
おこつて雲かくれ  
ほゝゑみながら  
しづかに上つて空高く

## 私の二つの人形

和賀郡川尻校三年

加藤 和子

私には二つのかわいい姉妹人形があります。姉の方は春子と言ひ、妹の方は花子と言ひます。私はこの二つの人形が一番好きです。まつくろなふさ／＼したかみをおかつぱにして、お目々はぱつぱりとして、小さい口もとほ、ほんとうにかはいらしゆうございます、そしてねかすとしづかにおね／＼します。或日私がお人形を持つて遊んで居ますと、おとなりの小母さんがお出でになつて「まあかはい、こと、だれにいたゞいたの」といひました。私は「つこりほゝゑんで」「この春お姉様の東京おみやげよ」といふと小母さんは「まあさう、してお前は。私は「春子と花子とつけたの。」といひますと、「いゝお名前ですこと。」とほめて下さいました。私はこの人形を持つてあそぶのが何より



楽しみです。

◇

ちぎれ雲

稗貫郡花城校高二

高橋 睦子

淋しい心で

黙つて空を見てゐたら

白いちぎれ雲が

流れてゐました。

あの方の心の様に

あちらにとんでゆく

淡くも淋しい

ちぎれ雲。

◇

兵隊さん

稗貫郡湯本校四年

小田島 さえ

私はへいたいさんをみるとかはいさうでたまりませんあめのふる日でもなんにもかぶらないでゐています私のうちのにいさんもへいたいについてきましたにいさんののはなしをきくと川にみづがいつばいきてもうまをこがせるさうですへいたい

さんなんぎですといつぎなのにかんじゆをかていましたおとひは大ついであるいたり、たい演習であめがふつてなんほうをうまにひかせたり



童 謡

してくるしさうにむかふのほうへ行きしました。

◇

秋の山

和賀郡倉澤校六年

佐藤 千代

秋になると山がちかく見えてるやうです。山は一めんに色づきました赤黄緑が木の葉に色づきましたどの山をみても木の葉がさら／＼おちるのが見えます。私のうちのうらの山も木の葉が赤くなりました。なにの木だらう目がさめるやうに赤く色づきましたおもてにあるかきのはもさら／＼おとがします。

◇

ある日

稗貫郡湯本校二年

山口 政雄

ぼくがおにはのさうちをしてゐますと たはらをつんだに車がさかにとまつて あせをながしてゐましたので、私はすぐとんでいつて車をうしろからおしあげました。すると、その人はたいへんよろこんで、ぼくに十せんのおあしをくださいましたから、ぼくの大すきな

せんべをかつてねえさんと二人でわけてたべました。ぼくはあの人がまたこられたら車をおしてあげようとおもつてゐます

◇

山遊び

和賀郡立石校

阿部 愛子

この間おかあさんと山遊びにゆきました、山の木の葉は赤くなつてゐました、私はしやせいどうぐを出して、すぐしやせいはじめました、一番さきに遠くの山をかきしました、二番目には、きれいな林を書きました。お母さんに見せたら『さつと甲よ』とおつしやいました、私はうれしくてたまりませんでした。またあるいてゆきますとお母さんが、はつたけを四つばかり見つけました私も見つけようとおもつて、一しよけんめいあるきますと。



あみのめを見つけてました  
かへりにくりをひろつて  
かへりました。

秋の夕方

和賀郡輕井澤校高一

下坂はつ

口で笑つて、眼で泣いて  
別れたお友だち。

『丈夫であるかしら』暮  
れて間のない秋の天空を  
眺めたら大きな星が  
一つ二つ輝いてゐた。

蒼くすんだあの空  
私もあんなに廣い、すん  
だ心になりたい。とつく  
づく考へてみる。

晩秋なのに、まだ何處  
かで、コホロギが鳴いて  
ゐる、『コロコロ』と

さつきまで鳴いてゐた  
鴉の聲は、もう聞えない  
そして寂しい秋の夕方  
は何んだか悲しい。

もう家に入らう。

ちらつとお友達顔が  
浮かんで来る、心の中で  
『サヨウナラ!!!』さう考へ

て入りこむ。

家の中では、母はごはんを  
たいてゐた、その赤い  
火先が氣味悪くゆらつ  
いてくる。

◇

明け行く朝

和賀郡黒尻校高二

玉澤よし

私はひよつと眼をさまし  
た。すると私の向ふにね  
てゐたおばつちやは「あ  
いねられない」と言

つて東の戸を開けた。私  
障子の破れから東の方を  
見てゐた。私は一休朝は  
どうしてあけて行くかと

見てゐた。こい水色に黒  
い幕でもおぼたやうであ  
る。この間に黒い悪魔の

やうなかげがただぼんや  
りうつてゐる。しばらく  
見てゐると、夜があけ

はじめるのか黒幕が消え  
て行つた。私はかう思つ  
た、あの黒い雲は、きつ  
とお日様がでて来ると恐  
ろしいからであらう。こ

いあい色は黒い幕をはが

れたので青々として見え  
るがまだ日が出ないので  
あたりの木の枝葉はよく  
見えないただ黒みが少し

うすくなつた木の影であ  
る。少しづつうすくなつ  
て行く空はさつきとくら

べると、もうあかるくな  
つたともいひたい感じが  
するうす水色である。え

んがわから少しはなれた  
所にある椿の木は黒いか  
たさうな葉をしてゐる。

つばきの木の向ふ側にあ  
る木は桐の木でのこぎり  
のはの様に大きくきりの

はいつた葉が少し黒のは  
いつたみどり色をしてゐ  
る。桐の木よりも高く二

三本のせんが見えるそれ  
はをかくせんの様である  
二本に見えたり三本に見

も勿論である。さつきは

電燈の光が明るく白く光つ  
てゐた障子が外があかる  
くなつたのでうすあかみ

をさして障子にしみこん  
で来た。まだあけない所  
の障子古い戸などはまだ

赤々としてゐる。さつ  
きまでふすまのかげにな  
つて電燈の光をつけてゐ

なかつた障子も今はあか  
らくなつてゐる。だがみ  
んなは氣持よさうにす

うすうとねむつてゐる。  
さきほどからとりの聲が  
聞える。とめから落ちる

水の音もごう／＼として  
聞えて来る。私は障子の  
破れ五六センチ四方の所

からこれを見た。

裏の夏の夕暮

稗貫郡花巻校

小田島さと

空は一片の雲さへなく、  
一帯はそは／＼した空氣  
に包まれながら一日の日

行く。夕暮の暮を這つて

行く、さつきまで田一面  
にまばゆい程の光りを投  
げてゐた、日は今は殘光

さへなく、薄黒色のもの  
があたり一帯に立ちこめ  
たえんの眞向ふの桶や

さんの眞白い乾物は光り  
を求める如くに左右にゆ  
れる。急ぎ足にかけ行く

人の薄い影をみつめてゐ  
た時突然ガラガラッ／＼  
と、つるべの音がぐれか

ゝつた田面から林の方に  
響いて行つた。井戸端に  
は一人の姐さんが急がし

そうに水汲みをしてゐる  
表の道を豆腐やさんが聲  
高に豆腐／＼ガラン／＼

と調子合せも急がしく通  
り過ぎた。小川の方から  
キヤッ／＼といふ子供等

の聲まだ川遊びをしてゐ

るのだらうか。鳥が列を

つくつてねぐらをさして

歸つて行く。臺所の方を

ふりかへつて見たら、赤

々ととした電燈が光つて

あたりを輝らしてゐる、

あゝ電燈がついた。





## 編輯室から

△さびしかつた編輯室も、皆さんのお力ぞへでだん／＼にぎやかになつてきました。

△それは愛読者から、どんな原稿を送つて下さるからです。△殊に子供さんたちからは學校の手を経ずに、おきに本紙に送つて下さるやうになりました。△よい原稿をたくさん送つて下さることは、本紙がのびてゆく最もよい養分でありますから、どんな／＼と原稿を送つて下さい。△本紙がのびると、それにつれて皆さんの力がのびてゆくのです。

△つまり本紙と皆さんは別なものでありません。さあお互に助け合つてのびてゆきませう。△皆さんはどこまでも、本紙を自分の兄弟としてかあいがつて學校のおけいこのひま／＼に、すみからすみまでよく読んで下さい。

△めい／＼で讀むばかりでなくお互にこの文はどうだとか、あの文はどうだとか、批評し合つて讀むのも、おもしろくそしてためになること、思ひます。

△干鰯はよつくかまなければよい味が出ないし、又どんなによい肉でもまるのみにすれば養分にならぬと同じことで、本紙もよくかんで讀まないとい味と養分になりませんから、よく讀んで貰ひませう。

△まだカットは出来ないでろく／＼おもしろいさしるもなく、ほんとうにさびしうございますが、第五號あたりからはきつとさういふ方の準備してにぎやかにする筈ですから、それまではがまんしいたゞくことをお願いします。

△家庭の方々にもその方面の記事をよつく讀んで下さることを願ひします。

△そしてまとまつた原稿送られたり、ご相談を申込まれることを願ひします。

△本號の作品に評のついたのは入賞のものです。

## 兒童作品懸賞募集

第四號の懸賞募集を致しますから皆さん振つて寄稿して下さい

### ◇注意◇

△作品は綴方、童謠、短歌、俳句、書方、圖畫。

△入賞者には賞品を贈呈します。

△締切は十一月廿九日。

△用紙はなんでもよろしいが字詰は十一字にして下さい。

△學校名、年級、氏名は是非記入して下さい。

△宛名は稗貫郡花卷川口町『子供の力社。』

## 子供の力 (毎週土曜日 月四回發行)

普通號定價		
冊	定	價
一冊	四	錢
一ヶ月	十六	錢
半ケ年	九十	錢

●代及郵  
●金は總て前  
●金は手代用  
●一切手代用  
●郵税は金十  
●錢也

昭和三年十一月廿二日印刷納本  
昭和三年十一月廿四日發行

(第三號)

發行兼編輯者 金澤 秀次

印刷者 赤澤 亦吉

印刷所 杜陵印刷所

發行所 子供の力社  
岩手縣花卷川口町



